

り参考文献が挙げられている。

物語編でかなり詳しく述べられている事項の中にも、また資料編で簡単に解説されている事項、年表で年次・所在等が1～2行で記されている事項の中にも、これまで歴史地理学の分野で全くとりあげられていないものが多数ある。そういうものの方が、ずっと多いといってよい。本書を手がかりとして実地調査を進めれば、きっと多くの成果が期待できるであろう。

また本書は中部地方だけしか扱っていない。本書を範として近畿・中四国・九州、あるいは関東・東北について似たような企画を立てることは、おそらく歴史地理学徒でも可能であろうと思う。我々の研究すべきテーマが、身近かなところにいくつでもころがっていることを気付かせてくれ、勇気づけてくれる本である。

(浮田典良)

木下 良 著：

『国府——その変遷を主にして』

教育社 1988年6月

新書判 334ページ 1,000円

著者が歴史地理学の立場から古代の国府の研究をはじめてやがて四半世紀になると、本書の「はじめに」述べている。このように長い年月を費した著者の66国3嶋にわたる精力的かつ克明な調査から導きだされた国府の復原研究の貴重な成果の、せめて一端だけでも公刊されるのが、古代歴史地理学を専攻する者にとって久しく待望するところであった。本書は以下のような構成で、それに応えるものである。

序章 律令国家の国府から王朝国家の国衙へ

1. 国府跡の発掘
2. 国府の立地と形態
3. 国府と交通路
4. 国府と寺院
5. 国府と神社
6. 古辞書類にみる国府所在郡
7. 国司制度と国府の変遷

付録 国府所在地一覧

序章において、8・9世紀の律令国家時代の国府・国庁と、10世紀以降の王朝国家時代の国衙とを区別すべきこと、府中はさらに後世の用語であるとして、研究上の概念の整理を提唱している。大筋において異論はないが、『続日本紀』宝龜11年7月26日

条に「長官以下急に国衙に向かひて……」とあるので「国衙」という用法が奈良時代にあったことになり、したがってそれに相当する概念も王朝国家時代に限定しておいては実体を示さないことになろう。上記以外に国治という言葉も『日本後紀』延暦23年正月26日と同24年11月20条にみえるので、国府関連の概念として考慮しておいてもよいと思われる。

国府研究は歴史地理学において長年の蓄積のある部門の一つであることはいうまでもない。米倉二郎や藤岡謙二郎らの先学の視点は、古代の国府の府域が一辺何町かの正方形であるかを現存の地割などによって復原することであった。国府が原則として正方形の形をとることを暗黙の前提としてあったことは否定できない。そのような前提の根拠となっていたのは、周防の国府が「国衙土居八町」とよばれていたことによるものである。しかし、周防国府跡における発掘調査の所見にしたがう限り、国府域の西辺を限るとされてきた土塁は中世末期以後に形成された天井川で、府域を画するような土塁は存在しなかったらしいことが明らかになった。さらに近年の調査では「想定国府域東北隅外側に奈良・平安時代の鍛冶工房跡がみつかったので、国府域は方八町域に限らないことも考えられるようになった」(38頁)という。このことは、歴史地理学の国府の復原研究にとっては重要な意味をもつといってよい。もし、古代の国府が定型をもたないことが一般論としていえるならば、歴史地理学の立場から古代の国府の平面形態の外枠の規模を復原するような従来の視点はその意味を減ずることになろう。

しかし、著者は必ずしも方何町という従来の国府プランの存在を否定してはいない。近江国府について「国府域ははたして方八町の区画内に限定されるだろうか。その意味で、私は従来国府域と称していた部分を府郭といい、府郭外の関連施設分布範囲を国府地域と呼ぶことを提唱したことがあるが、本書では混乱を避ける意味で、従来どおりの呼称で通すことにする。このことを明確にするためにも、国庁跡だけにとどまらず府域内外の広範な調査が期待されるのである。」(47頁)という。確かに著者の意図は古代の歴史地理学に携わってきた者にはよく理解できるのであるが、それならば府郭とは現実にとどのような施設としてあったのかということについて改めて問題にしなければならないであろう。

著者が国府プランの復原に他人には測りがたい多

くの試みをなしてきたことを、この国府域の問題に限定しても本書に垣間見ることができる。例えば出雲国府については「後述の伯耆国府跡の場合も同様であるが、従来考えられてきた、いわゆる国府域はかならずしも方何町という地域に限定しなくてもいいのではなからうか」(62頁)と述べ、「肥前の場合も……方何町というような外郭線も考えがたいよう……」(80頁)とし、いわゆる府域(府郭)の定型性を指摘していない。しかし讃岐国府では、「40間(72メートル)方格の方八町が地割に最もよく適合する。」(89頁)ことを推定している。結局、著者は2章で「いままでわれわれは国府域を方何町と画定することに、あまりにもこだわりすぎたようである。多賀城や城輪柵のように四周に明確な田郭を認めるものもあり、周防・近江・讃岐のなどのように、二・三方を周濠的な川や水路に限られるものもあるが、多くの国府想定地では周郭にあたるものは、ほとんど見当たらないのである。」(100頁)という見方に到達する。

多言するまでもなく、著者の国府研究はプランの復原にとどまるものではない。しかし、先学たちが仮定した方何町という国府プランの復原的研究を継承しながらも、上のような一応の結論を提示しえたことは、著者の研究が国府研究を新しい水準に導いたことを示すものと評価してよいであろう。

国庁については近年発掘調査によって建物の構造や配置が明らかになりつつあり、その位置が国府域のどのあたりを占めたかについても本書で検討されている。この問題も著者自ら述べるように、「国府域の想定自体に問題のあるところが多いので、なお今後の検討に待つべき」(106頁)であるが、やはり国府域というものがどの程度実体をもっていたかは、歴史地理学が負わねばならない課題であると思われる。

著者が国府研究においてこれまで指摘してきた重要な問題は、本書に要領よく記述されている。国府と条里、国府と駅路、国府と駅家、国府付属寺院、国府と国分寺、国府と神社などの関係などが具体例をあげて叙述されていて理解しやすい。

国府付属寺院について、それらの「多くは最初国府所在郡の郡寺として成立し、後に国府の整備にともなって、国府付属寺院に転用されたものではなからうか」(168頁)という仮説を提起している。著者が挙げる国府付属寺院の中に大興寺という名のもの

が伊豆、能登、若狭にあり、それらは「中国で隋が国都を大興城と呼び、地方官寺を大興国寺としたことなどに無関係とは思われないからである。」(163頁)という指摘も興味深い。このことと無縁ではないと思われるが、わが国古代の国府と中国の隋・唐の地方都市との比較研究も今後の必須の課題とならう。

国府と神社についても示唆的な記述に接することができる。従来、国府の所在地を推定するために総社の位置が手掛かりとされた。しかし「国司が神拝のために下向するようになった、11世紀後半以降になって、初めて総社の存在が必要になったものである」と考える」(217頁)とされ、同じく国府所在地を見いだすよりどころの一つであった印鑰社についても、本来倉庫の鍵を意味していた鑰も平安時代末期には国印をおさめる箱の鍵を意味するようになり、「印鑰はもはや単に律令的権威の象徴にすぎないものとなり、やがてこれは神格化して神社に祭祀するようになったものと思われるのである。従って印鑰社の存在は、中世の国府・国庁の所在を意味するもので、国府の変遷・移転が少なくなかったことを考えれば、かならずしも律令期の国府の所在を示すことにはならないのである。」(224頁)と明確に指摘している。

上のような総社や印鑰社についての年代論的な考察は、今まで国府即古代地方都市とみて、府中をはじめ総社や印鑰社あるいは関連地名から所在地を推定してきた方法に反省を迫るものである。

今、仮に、米倉二郎や藤岡謙二郎による国府を含む古代景観の復原的研究の時代を第1期とすれば、著者木下らによって現在推進されつつある時期を第2期とよんでよい。上にみたように国府研究をとりあげてみても著者によってかなりの程度に精緻な分析がなされるに至ったことを知ることができる。しかし、この第2期には考古学による国庁の発掘調査が実施され、歴史地理学の国府研究の意味が問われつつあるのも現実であろう。それ故にこそ著者は国府について単にプランの復原にとどまることなく多角的に検討したのであり、その成果を盛った本書によって、さらに近い将来より詳細なデータによって集大成されるにちがいない著者の国府研究は、歴史地理学の一つの到達点として評価されねばならない。

そして、著者の後に続く古代歴史地理学の研究者が国府研究をはじめとする古代景観の復原について

第3期を刻印するという名誉を担うためには、東アジア全体を視野にいたれた比較論から日本の古代景観を意味付けることが必須の作業となるであろう。

(千田 稔)

速水 融著：

『江戸の農民生活史——宗門改帳にみる濃尾の一農村——』

日本放送出版協会 1988年7月

B6判 211ページ 750円

歴史人口（民勢）学の研究者は、日本を“Treasure Island”と呼ぶことがある。わが国には江戸時代に作成された「宗門改帳」をはじめとする人口史料が豊富に保存されているために、国外の研究者から羨望の眼差しで眺められているのである。近年は、国外の研究者が「宗門改帳」を史料として著書・論文を公表する機会も急増している¹⁾。

1986年1月には IUSSP（国際人口学研究連合）歴史人口学東京セミナーが「歴史における都市化と人口移動」をテーマとして慶応義塾大学で開かれ、国内外の40本もの報告が活発な討論の対象となった。国際会議に先立ち、1984年には歴史人口学研究会が発足した。日本でもようやく、この研究分野の市民権が認められようとしている。

著者は日本における歴史人口学の生みの親であるとともに、生まれて日の浅い歴史人口学を幾多の国際会議・論文を通して主導し続けてきた。「宗門改帳」が国際的な学術用語として定着し、本書で事例とされている美濃国安八郡西条村の名が国外に知られるようになったのも、著者を総帥とする慶応グループの研究活動の成果の一つである。

歴史人口学の成立は、1950年代後半フランスで家族復原法が開発された時点に遡る。家族復原法によって、工業化社会以前の家族の人口学的行動を観察できるようになっただけでなく、識字率など民衆の生活全般に及ぶ情報が教区簿冊から得られるようになった。工業化社会への移行期に生じた民衆生活の変貌過程の解明を目指したアナル学派の社会史、あるいはプロト工業化論の華々しい展開の基礎には、歴史人口学側の地味な蓄積があったのである。国外の研究者が難解な古文書の読解に挑む背景にも、短期間のうちに工業化・都市化社会を築いた日本の近代的経済発展の出発点を江戸時代の社会構造に求め、西欧と日本の移行過程を比較検討する、という壮大

な問題意識がうかがえる。

「宗門改帳」を主な史料として農民生活を復原するという問題意識は、もとより研究機関に在籍している者だけに占有されているわけではない。史料を保存している地元の有志が、家系図を作成したり、先祖の生涯を調査している例も二、三にとどまらない²⁾。このような貴重な研究を個別事例の仇花に終わらせないためにも、歴史人口（民勢）学研究の視座と研究法を記した手引書の必要性が高まっている。

本書はNHKブックスの一冊として軽妙な語り口と大胆な仮説によって、内外の歴史人口学研究者が醸し出している熱気を一般読者に伝え、過去への思考を促す触媒となることに成功している。本書の構成は以下に示される。

第1章 民衆生活史と歴史人口学

第2章 宗門改帳の整理法

第3章 西条村とその周辺

第4章 西条村の人口統計(1)

第5章 西条村の人口統計(2)

第6章 人々の多彩な生涯

第7章 西条村人口史と江戸

本書の主題は江戸時代の西条村で生きた農民の日常生活を具体的に復原することである。前著³⁾で成功を取めた人口史を展開しようとする著者の意図が第1章から看取できる。この点が歴史人口学の研究動向を平易に要約した他の入門書⁴⁾と異なる特色である。とくに、従来の近世農民史研究はあたかも基礎工事抜き建築であり、「経済的法則にせよ、政治支配にせよ、現実の農民生活がどうであったかを知らなくては、正確に掴むことはできない」という主張には双手を挙げて賛意を表したい。

第2章には研究方法が提示されている。著者が1960年代に導入・改良を加えた家族復原法は、(1)「宗門改帳」を世帯ごとに基礎シート(BDS)に筆写する、(2)BDSから静態人口統計シート、世帯シート、家族復原フォーム、個人行動追跡シートの4表を作成する、(3)各表から人口学的指標を計算する、という順序で史料整理作業が行われる。しかし、この方法をもってしても、「宗門改帳」読解から人口学的指標算出までの作業過程は膨大であり、精神力・体力ともに強腎でなければ1ヶ村の人口統計を作ることにすら困難を極める。また、苦勞して「宗門改帳」を筆写しても公刊される可能性が少ないために、研究者が史料を相互利用することは不可能に近